

ケニア、子どもたちの日常生活と生活意識

Daily Life of Children in Kenya and Their Sense of It

西方 毅

(Tsuyoshi NISHIKATA)

キーワード：異文化、子ども、発達

Key Words : crosscultural, child, development

1. はじめに

環境が子どもの発達に大きな役割を果たすことは言うまでもない。発達心理学を始め社会学や文化人類学など、さまざまな領域の研究は子どもと環境の相互作用、その発達に及ぼす影響を研究してきた。特に、最近主流となりつつある心理学における生態学的研究法は、従来の実験室内での研究、統制された特殊な経験の影響、具体的、日常的な脈における環境の影響を検討することにより、子どもの発達の様相をより実態に近くかつ詳細に捉えようとしている。

ところで、環境の影響、特に現代の文明の影響、機械化や情報化の影響については、まだ十分検討されていない。テレビゲームのように、子どもたちの生活を激変させた機器の影響さえまだ十分に解明されていないのである。(西方、2003) その大きな原因の一つが、子どもたちの置かれている環境の等質性である。現代日本のほとんどの子どもたちは、冷暖房の利いた部屋で豊かな物資に囲まれ、発達した交通機関を利用して生活している。特に、テレビ、携帯電話、テレビゲームなどの高度な電子機器の普及は著しく、現在、こういったものがほとんどない家庭は極めて少ないであろう。したがって、このような器具・機器類の影響を検討しようにも、比較対照する資料がないのである。

一方、後開発国と呼ばれるKenyaの子どもたちの生活は、日本を含む先進諸国の子どもの生活とは大きく異なっている。単に貧しいだけにとどまらず、電気、水道、電化製品など、すべてが欠けており、現代文明の影響がまだ限定的なのである。そこで、Kenyaの子どもたちの心身の発達を、日本の子どもたちのそれと比較すれば、現代文明の影響、子どもたちの発達への影響を明確にできる可能性がある。もちろん、文化の相違、経済水準の相違、気候風土の相違など、子どもたちの発達に影響する要因は多々あるであろう。しかし、それらと関わりの少ない環境的影響も考えられる。それらについては、先に挙げた各種要因の存在にも関わらず子どもたちの心理的発達の比較は可能ではないだろうか。この研究は、以上のような仮定の下に、現代文明の影響を明らかにしようと試みるものである。

今回の調査は、その最初のステップとして、子どもたちの生活環境について前回の調査（西方 2006、以下「前調査」と略記）で不明であった諸点と、そのような環境を子どもたちがどのように意識しているかについて検討するものである。

2. 調査概要

調査時期：2006年11月、12月

調査地：Kenya共和国Kajiado県Namanga町

調査内容：子どもたちの生活環境、生活実態、
生活への意識、知覚能力

テスト

調査方法：面接・質問紙折衷法⁽¹⁾

調査対象：6歳以上10歳以下のnursery school児⁽²⁾、計28人（Table 1）

Table 1 年齢分布

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	合計
男子	3	8	4		2	17
女子	1	4	5	1		11
合計	4	12	9	1	2	28

3. 調査結果

1) 家庭環境

i) 子どもの生活空間

子どもたちが生活する家庭環境の中で、注目されるのが部屋数の少なさである。Table 2にあるように、子どもたちの22人までが1部屋ないし2部屋に住んでいる。⁽³⁾ 広さについては明確でないが、2005年の実地調査（未発表、以下「実地調査」と略記）、それ以降の現地の個人宅訪問の場合に見た限りでは、1軒の家は縦3～4m、横5～6m程度である。二部屋ある場合でも、この程度の広さの家を、扉のない中仕切りで2つの部屋にわけていることが多い。特にMaasai族⁽⁴⁾の伝統的な家では、単に一軒の床面積が狭いだけでなく天井も低く、背の高い人であれば、中を立てて歩くのが困難なほどである。このように、子どもたちの生活している物理的空間は、日本の子どもたちのそれに比べて著しく狭い。カンバ族の生活を調べた日高（1984）、マサイ族の生活を記録したRead（1988）なども同様のことを指摘している。現代のNamangaの子どもたちの家庭生活空間は、数十年前とあまり変わっていない。

次に、家族の人数であるが、全体の平均人数が5人強となっている。この数字は、前調査の結果とほぼ同じである。（西方、2006） 前回は、「家」＝「ボーマ」⁽⁵⁾ という理解の可能性が

Table 2 家族構成

部屋数	回答数	平均家族数	父同居	母同居	祖父同居	祖母同居
1部屋	12	5.5	8	11	0	4
2部屋	10	4.8	6	9	1	3
3部屋	5	5.2	1	1	0	3
5部屋	1	5.0	1	1	0	0
全体	28	5.2	16	22	1	10

残っていたために断定を避けたが、今回の調査（以下、「本調査」と略記）結果も同様であったので、Namangaにおける一軒の同居家族の人数はほぼ5人程度としてよいであろう。なお、この数字自体はそれほど大きな数字には見えない。日本の場合でも家族の人数が5人というのは決して珍しくない。しかし、Kenyaの場合は、一軒の家の床面積は6畳2間程度の広さであり、そこに5人強の人が起居しているのである。しかも、その家の中に荷物を置き、その一角で炊事や食事もするのである。それから考えると、子どもの個人的な空間は極めて狭いことが分かる。実地調査でも（貧しい家が多いのであるが）、子どもたちは昼間ほとんど家にいなかった。家は、夕方暗くなって帰ってきて、食事をして寝る空間である。家には、子どもたちが個人として過ごすための空間は存在しないのである。夜寝るときにも、子どもは一部屋の適当に決まっている自分の寝場所（ベッド：家族で共有することも多い）で寝てしまう。⁽⁶⁾ もちろん、室内の火やランプを囲んで年寄りや親から昔話を聞くこともあるし、親がしている仕事の手伝いをすることもある。また、ランプの下で勉強する子どももいる。しかし、基本的には家は寝るための場所なのである。

以上のように、Kenyaでは、家は子どもたちにとって心安らぐ自分の居場所といった意味はなく、単なる食事をとる場所ないし寝場所という意味しかない。一方、日本を含めた先進国では、家は単なる寝場所、食事をとるだけの場所というだけでなく、レクリエーションの場や個の独自の活動を行う場としての機能を持っている。特に、現代の日本の子どもたちは、多くが個室を持ち、ゲーム機やコミック本を読みながら、誰にもじゃまされない自分だけの時間を過ごす。

子どもたちの家庭内での生活は、子どもの人格形成にさまざまな影響を与える。常に他者との空間を共有する生活をする子どもたちと、他者と完全に隔離された空間で生活する子どもたちでは、協調性、攻撃性、対人関係におけるストレス耐性など様々な面で相違を示す可能性がある。

ii) 家族構成

前調査でも、Namangaでは父親と同居していない家庭が41.3%あった。本調査でも、父親が同居していない家庭は42.9%であり、ほぼ同じ結果となっている（table 2）。Namangaの家庭では、半数近い家で父親がいないのである。プライベートな問題であり、また、子どもたち自身も詳しく知らないことが多いためにその理由については明らかではないが、以下のような原因が推測される。第一は、アフリカに広く見られるポリガミー（一夫多妻制）の伝統である（Merand, 1977）。そのような伝統の元では、子どもは基本的には母親と同一家屋内で生活し、子どもの面倒を見るのは母親である。Namangaでは、近代化が進んだとは言えこのような家族の形態はまだ色濃く残っていると思われる。祖父が同居している家庭が極めて少ないこともその点を示唆しているように思われる。第二は、父親が出稼ぎなどで不在ということも考えられる。「つらいこと」と言う質問に、「父親が家にいること」と答えた子どもがいた。そのわけを

尋ねたところ、「父親が仕事しないと食べ物がない」とのことであった。父親が出稼ぎに行かないと生活が成り立たない家庭も多いのである。この他に、死別、離婚などの理由も考えられるが、その割合は定かではない。いずれにせよ、ほとんどの家庭に父親がいる日本の子どもたちとはかなり異質な家庭環境であると言えよう。

なお、母親のいない家庭も20%強見られた。この数字は前調査（母親不在が13.8%）よりも大きい。これらの数字の差は有意ではなかった。このような母親不在家庭の存在、特に父親不在家庭の多さは、Kenyaの子どもたちの発達にどのような影響を与えるであろうか。現代の日本を含めた先進国の発達理論（例えば、Erikson, 1963など）は、子どもの発達における父親の役割の重要性を説いている。しかし、Namangaのように父親不在社会では、子どもの人格形成はどう行われるのであろうか。子どもたちの家族観や家庭における男女の役割分担などは、西欧諸国とどのように異なるのであろうか。これらの点は極めて興味深い。⁽⁷⁾

2) 子どもの生活

i) 一日の生活

前調査でも明確であったが、ほとんどの子どもたちは、朝6時頃起き、夜8時から9時に寝るという生活を送っている。⁽⁸⁾ 電気が来ていないことがその最大の理由であると思われる。この地域には2006年後半期に電線が敷設され、経済的に豊かな家では電気を利用できるようになった。しかし、大部分の家庭は貧しく、電気を利用できない家庭がほとんどである。したがって、夜はランプの下の生活であり、遅くまで起きていることは少ない。また、朝は5時半にイスラム教の祈りへの呼びかけ（adhan, アザーン）が聞こえ、大人たちが起き出す。狭い室内であるから、それに合わせて子どもたちも起き出す。こういった生活であるから、子どもたちの睡眠は極めて規則正しいものになる。

今回の調査で、ラジオのある家は78.6%、時計のある家も同じく78.6%であった。両方共「ない」と答えたものは1名だけであり、残りの27人の家には、そのどちらかがあった。今回は、それらが実際に動いているかどうかを確認し、動いており、かつ使用している場合のみ計数した。本調査の数字は前調査の数字（それぞれ81.4%、88.2%）と極めて近い数字である。本調査では、Namangaの貧しい家庭を対象に調査していることを考えると、Namangaでもほとんどの家にラジオか時計のあることが分かる。このことは、日の出と共に起き、日の入りと共に家に帰ると言う、時間との関わりのない牧歌的な生活をしているようではあっても、時刻についての意識はかなり浸透していることを示す。なお、本調査の対象児童のすべての家に電気が来ておらず、また、テレビは無かった。

ii) 子どもたちの活動

子どもたちの遊びとしては、男子でもっとも多かったものはサッカーであり53%の子どもが挙げている。ついで、「おもちゃの自動車で遊ぶ」（木で作ったもの）が17.9%、その他は、「タ

イヤを転がす」「かけっこ」「おにごっこ」などが10%未満で続く。いずれも野外の遊びである。一方、女子では「けんけん」63.6%、「ままごと」63.6%、「縄跳び」27.3%、「サッカー」18.2%となっている。前調査では、対象が日本で言えば中学生の年齢であったために「ままごと」はまったく見られなかったが、本調査の対象は日本で言えば小学校低学年に当たるために、女子でままごとすると答えたものが多かったと考えられる。このような男女差は極めて興味深い。文化的な相違にも関わらず、男子は野外の競争的な遊びや自動車を使った遊びに興味を示し、女子は、ごっこ遊びやけんけん、なわとびなど、模倣遊びや身体の巧緻性を必要とするような遊びを好むのである。これらの事実は、男女における遊びの相違が文化を超えた生理心理学的な起源を持つ可能性を示唆するものである。

手伝いについては、前調査でもそうであったが、すべての子どもが「している」と答えた。手伝いの内容はtable 3に示すようになっている。

特に多いのが「食器洗い」と「掃除」である。両者共に3人中2人前後が記入している。ついで、水くみが39.3%となっている。Namangaでは、近辺の山のたまり水や低地で汲み上げた水を引いてくる簡易水道があるが、子どもたちのそれぞれの家までは来ていない。近い場合は数メートルのところに蛇口のついた共用水道があるが、ちょっと町から離れると、近くには水道

はなく、川まで行かないと水が手に入らない。水源まで遠くても子どもたちは水くみに行かされるのである。重い容器を、場合によっては1キロ以上も運ぶのであるから、かなり重労働と言える。それ以外は、買い物、洗濯といったものが続く。なお、手伝いの中で注目されるのが「放牧の世話」であった。男子3人と少ないのであるが、放牧は長時間におよぶ上に、動物という貴重な財産を預かる責任の重い仕事である。しかし、筆者が調査に訪れる度に、10歳前後の子どもたちが放牧された動物をじっと見張りながら過ごしている場面を目撃する。決して、一部の特殊な家庭の仕事ではないのである。

このように、Kenyaの子どもの「手伝い」は、日本的な手伝いとは大きく異なる。日本の場合、例えば「朝、新聞を持ってくる」といった極めて軽い仕事がほとんどである。しかし、Kenyaの子どもの場合、「水くみ」、「動物の世話」に限らず、「掃除」にしても「洗濯」にしても、責任を持たされる長時間わたる「仕事」なのである。こういった仕事を子どもの時からさせられる子どもたちの「労働」に関する感じ方はどうであろうか。事項で述べるが、「労働」自体さほど苦痛とは取られていないようである。この点については、次回以降の調査でさらに追求したい。

Table 3 家の手伝い（複数回答）

手伝い	男子	女子	合計	割合
食器洗い	9	11	20	71.4
掃除	9	8	17	60.7
水くみ	8	3	11	39.3
買い物	3	2	5	17.9
洗濯	3	2	5	17.9
放牧の世話	3	0	3	10.7
弟妹の世話	2	1	3	10.7
炊事	1	1	2	7.1
畑の世話	0	1	1	3.6

（%）

3) 子どもの生活意識

本調査では、前調査で取り上げることができなかった、子どもの生活意識について質問を試みた。ここでは、最初の3項目「生活の中で楽しいこと、うれしいこと」、「生活の中で嫌なこと、つらいこと」、「欲しいもの」について見てみよう。

i) 生活の中で楽しいこと、うれしいこと

子どもたちは、毎日の生活の中でどのようなことに楽しみや喜びを覚えるであろうか。Table 4は、「生活の中で楽しいこと、うれしいこと」についてまとめたものである。もっとも多かったものは勉強に関わるものであった。それぞれ、「学校に行くこと」3人、「勉強すること」6人、合計9人、全体の32.1%に及ぶ。次いで食べ物に関するもの「食べること」、「肉を食べること」、「魚や米飯を食べること」などが6人、21.4%となっている。また、遊ぶことを楽しいと回答したものは5人、17.9%であった。答えられないために「特にない」としたものは7人、25.0%である。また、「(質問の意味が)よく分からないけれど、楽しく生きてるよ」とか、「生きていること」などと回答したのも3人、10.7%あった。

Table 4 楽しいことうれしいこと (複数回答)

内容	男子	女子	合計	割合
食べること	5	1	6	21.4
遊ぶこと	5		5	17.9
勉強すること	2	2	4	14.3
学校に行くこと	1	3	4	14.3
生きていること		3	3	10.7
きれいな服を着ること		1	1	3.6
本を読むこと		1	1	3.6
手伝いをする		1	1	3.6
お金をもらうこと	1		1	3.6
寝ること		1	1	3.6
特にない	3	2	5	17.9

(%)

ii) 生活の中で嫌なこと、つらいこと

一方、Namangaの子どもたちにとって嫌なこと、つらいことは何であろうか。彼らの生活は日本の子どもたちと比べて不自由や不足が日常的に存在しているわけであるから、多様なものが出てくると予想された。しかし、実際には、「特にない」(「思い出せない」1人を含む)という回答が16人、57.1%あったのである。予想外の結果であるが、考えてみればそれも当然であるかも知れない。不自由や不足が日常的であり、自分だけでなく他の子どもも同様な状況であれば、それは、「当たり前」の「日常」の経験であり、特に「嫌だ」、「つらい」と言う意識はないのかも知れない。しかし、一方、「食事が無いこと」、「空腹」など、切実な回答をしたものも4人、14.3%あった。本調査の対象は、全般に貧しいNamangaの町のさらに貧しい家庭の子どもたちであるから、食事が無い日もあると思われる。このようなつらさは日本の子どもたちと比べることはできないであろう。また、「水くみがつらい」と回答したものが2人、7.1%あった。水場からの距離が遠いのであろうか、それとも頻度が多いのであろうか、このことも子どもたちの「お手伝い」の厳しさを物語るものである。それ以外は、「Namanga町の中を駆け抜

ける乱暴な車が嫌だ」、「畑を荒らすゾウが嫌だ」、「ライオンが嫌だ」という回答もそれぞれ1人ずつあった。

iii) 今、欲しいもの、したいこと

この質問に対する回答をまとめたものがTable 5である。意外であったのは、最も多かったのが「家事の手伝い」の25.5%であった。実に、4人に一人が回答しているのである。また、予想通りであったのが「遊ぶこと」の21.4%であった。次いで、「おもちゃ」が14.3%、「学校に行く」、「勉強をする」、「ノート、鉛筆」が10.7%で続いている。「学校に行く」

Table 5 欲しいもの、したいこと（複数回答）

内容	男子	女子	全体	割合
家事の手伝い	2	5	7	25.5
遊ぶこと	4	2	6	21.4
おもちゃ	4	0	4	14.3
学校へ行くこと	2	1	3	10.7
勉強をすること	1	2	3	10.7
ノート、鉛筆	1	2	3	10.7
もらえるもの何でも	1	1	2	7.1
特にない	4	1	5	17.9

(%)

く、「勉強をする」の両者は同じことを指すものと考えても良いであろう。そうすると、学習に関する回答は21.4%と言うことになる。以下、「ノート、鉛筆」、「もらえるものなら何でも」と続く。「とくにない」は、17.9%である。

子どもなら「遊びたい」あるいは「おもちゃが欲しい」という回答が多いことは予想されるのだが、「家の手伝いをしたい」という回答が多いことは予想できなかった。家事手伝いでお小遣いやおやつがもらえるわけではない。家事手伝いが楽なわけでもない。そうであるにも関わらず、なぜ4人に1人が「家事の手伝い」がしたいと答えたのであろうか。先進国日本に住み、「面倒なことはしたくない」子どもたちを見慣れている筆者らには、このような子どもたちの気持ちは理解しがたい。この点については次回以降追求したい。

「学校に行きたい、勉強がしたい」という回答については理解できる。本調査の対象は、小学校に行くための予備的な勉強をしている保育園児であり、経済的事情により学校に行けなかった子どもたちである。他の同年齢の子どもたち、特に自分の知り合い、親戚の子どもが学校に通っているのを日頃見ているであろう。自分の知らない世界で楽しそうに生活し、自分の知らないことを学んでいるのである。保育園に通い、その生活の一端をのぞいた子どもたちが、「自分も他の子たちと一緒に学校に行きたい」、「勉強したい」という気持ちを持つようになるのは当然のように思われる。

ところで「とくにない」という回答は奇妙に思われる。豊かで、さまざまな遊具、玩具、菓子などに恵まれている日本の子どもでさえ常に欲しいものはある。ところが、何もかにも不足し、食べ物すら十分でないKenyaの子どもたちが「欲しいものがない」と答えているのである。彼らが、何もかにも不足だらけの生活に満足して、満ち足りているとはとても考えられない。なぜ欲しいものがないと答えたのであろうか。明確ではないが、「欲しくても、自分には縁がない、手にはいることはない」と、子どもながらに考え、それ故に、「欲しい」という意識を抑圧

し、「欲しいものはない」と答えたのではないだろうか。このことは、一人の子どもが、「特にない。でも、もらえるものなら何でも欲しい」と答えたことから裏付けられる。もちろん、単に思いつかなかっただけかも知れない。この点もさらに追求してみたい。

4. 全体の総括

以上、今回の調査の概要を見てきたが、前調査で不十分であった諸点を詳細に検討すること、および、子どもたちの気持ちをくみ出すことを試みた。ここで、全体の総括を行う。

家庭環境は、日本とは大きく異なる。1部屋ないし2部屋の狭い家に5人ほどの家族が起居する。母親を中心とした家庭が全体の半数近くに及ぶ。両親がおらず、祖母が子どもの世話をしている家庭もある。先進国のような父親と母親により構成されるそれとは大きく異なる。そういった、いわゆる「欠損家庭」では、子どもの性役割の獲得、人格形成などはどのように行われるのであろうか。Kenyaでも、個の確立、性役割の獲得などが伝統的な人間観によって矛盾なく行われた時代もあったであろうが、現在では、急速な都市化、西洋化によりかつての伝統的な社会は崩壊しつつある。そのような状況で、子どもたちの社会的発達はどのようになされるのであろうか。

子どもたちは、家の中に自分の空間を持たない。家の中には遊び道具もなく、子どもたちは家の中で遊ぶことはほとんどない。家は、子どもたちにとっては単に家族が集まって食事をする場所であり寝る場所ではない。もちろん、家族が集まること、寝ること、食べることなどは人間の生活の根幹をなすものであるから、重要な場所であることには違いない。しかし、それは、日本人を含む先進国の子どもたちが住む家とは大きく異なる。先進国では、家は単なる休息の場所、外敵から身を守る場所ということを超えて、娯楽の場であり、個人的な活動を可能にし、個性を育む空間となっている。このような空間を持たないKenyaの子どもたちの人格発達は、先進国の子どもたちとどのように異なるのであろうか。

子どもたちは、生活のほとんどの時間を屋外で過ごす。また、家事手伝いをすることも多い。正確な統計はないが、筆者らによる現地調査（未発表）や、現地の人々からの話から、子どもたちの手伝い時間は30分～2時間程度であると推測される。その一方、暇があれば子どもたちは遊んでいるが、そのほとんどがサッカーやかけっこ、けんけん、ままごとなどであり、野外の活動である。これらの生活は、日本の1950年代以前、まだテレビが出現前の子どもたちの生活を彷彿とさせる。確かに民族的、文化的な相違はあるであろうが、当時の日本も貧しく三度の食事のままならない子どもも多かった。また、ほとんどの子どもたちが野外で遊んでいた。同時に、その時代は、映画、ラジオ、様々な文明の利器などを通してアメリカ文化が浸透しつつあった時代でもあった。それらは、現代のKenyaの子どもたちと極めて類似したもののようと思われる。その点では、現代の子どもたちとKenyaの子どもたちの発達の比較は可能であるし、意味があると言えよう。

子どもたちの楽しみ、苦しみ、欲しい物などについては今回初めて調査を行ったわけだが、

そこには、貧しい家庭の子どもたちの生活が強く反映されていた。子どもたちにとって、楽しいこと嬉しいことは、勉強することであり、そして、(他の一般の家庭の子どもたちと同様に)学校に行くことであった。また、食事が満身に食べられることが楽しいことであり、食べ物がないことや空腹が辛いこと、苦しいことであった。こういった回答には子どもたちの生活全般の貧しさが如実に表れている。

子どもたちの欲しいもの、したいことに、家の手伝いが挙げられたのは意外であった。それも一人、二人ではなく、全体の4分の1に及ぶのである。日本を含む先進国では、子どもたちが家の手伝いをするのはあっても、「したいから」するのではなく、「親の命令」、「義務」、時には「社会生活の予備訓練」としてやっている場合が多いと思われる。お手伝いが楽しいと言う子どもは多くはないであろう。それ故に、Kenyaの子どもたちのこの回答は、大げさに言えば理解に苦しむものである。同様に、欲しい物が何もないと言う回答も意外なものであった。何もかにも不足している彼らが、「何も欲しくない」と答えるのである。貧しさ故に、欲しくても手にはいることはないと言うあきらめからそう答えるのかも知れない。もちろん、単に欲しい者が思いつかなかっただけかも知れない。

今回の調査は、主としてKenyaでも比較的貧しい家庭の子どもたちについて調べたものである。しかし、Kenyaでは、授業料の負担の可否、あるいは、食事の回数や量の多少などの違いはあっても、ほとんどの子どもが似たような状況で生活している。その意味では、ここで得られた結果は、Kenyaの同年代の子どもたちの一般的な生活実態や生活意識に近いものであると考えられる。ただし、これは主として7、8歳の子どもの意識であるから、他の年代とは異なるであろう。広く、Kenyaの子どもたちの生活意識、欲求などについて明らかにするためには、今回よりも高学年を対象とした調査が必要であると考えられる。次回以降の調査の課題である。

【注】

- (1) 調査方法としては、単純な選択肢ではなく自由回答式の質問紙法を採用した。ただし、今回対象とした子どもたちは、保育園の子どもたちであり、まだ文字を読むことができない。そのために、口頭で質問し口頭で回答する方法を用いざるを得なかった。その結果、面接法・質問紙法の折衷的な方法となったものである。質問項目は、日本語で作成したものを、日本人・Kenya人の教員協同で翻訳したものをを用いた。なお、家族構成については、家族の成員の名前をたずねる方法を用い、部屋の間取りなどについては、家族の誰がどこで寝るか、どこで食事をするかなどの補完的な質問も行い回答の信憑性を高めるよう工夫した。
- (2) Kenyaのprimary school(8年制)は義務教育になっているが、生徒数が多いこと、また、1年生から英語の授業があること、家庭や社会などが子どもの教育についてはほとんど配慮していないことなどから、primary schoolに入学する前に予備的な教育を受けることが必要である。そのための教育組織がnursery schoolである。nursery schoolはほとんどが個人経営であり授業料を取っている。貧困家庭では6歳でnursery schoolに通わせることができないことも多く、nursery schoolに入園した時には8歳、9歳になっているものも見られる。(丹埜 1990など) 今回調査対象としたnursery schoolは、貧しい子ども対象とした授業料が安い民間団体の施設であるために、年齢の高い子どもが

多い。

- (3) 前調査(西方、2006)で、Namangaの子どもの家の部屋数は、平均で4部屋となっていた。今回の調査結果と比べて大きな差がある。このことは前回の論文で指摘したように、Kenyaの子どもたちが「家」を「ボーマ (boma) (親類などが住む1区画) ととらえて部屋数を答える可能性を示唆するものである。今回の聞き取り調査では、日本などの先進国で言う家(同居家族が集まって住む一軒の建物)とすることを確認しながら部屋の数を調べた。
- (4) 今回の調査地のNamanga町は、Kenya南部からTanzania北部に広がるMaasai Landと呼ばれる地域であり、人口2万5千人のかかなりの部分をMaasai族が占めている。したがって、調査対象者の6割程度はMaasai族である。ただし、伝統的な家に住んでいるMaasai族は少なく、かなりの人々は現代的な平屋、泥壁トタン葺きの家に住んでいる。
- (5) 「ボーマ」とは、家畜用の囲いや囲いに使われる植物を指すスワヒリ語である。転じて、親族を含めた一家の住む敷地全体、さらには「居住地区」と言う意味で使われることもある。
- (6) アフリカの多くの部族では、乳幼児を除いて、子どもの寝る場所は大人の寝る場所とは分けられている場合が多い。例えば、伝統的Maasai族の場合、2m×4mの一軒の家が大きく三つの部分に分けられ、中央が暖房の火を炊く場所であり、その両端に、一方が父母の部屋、他方が子どもの部屋になっている。部屋は床面よりやや高くなっているだけであり、明確なしきりで分けられているわけではない(Read 1979など)。これは他の部族でも同様である(日高 1984など)。筆者の調査した家もほとんど同様の家屋構造であった。
- (7) もちろん、アフリカの部族社会においては、その部族の特有の価値観や社会システムがあり、それらを受け入れている限りにおいては、個人が自己のアイデンティティについて悩んだり葛藤したりする余地はなかった。(オレ・サンカン 1979など)、しかし、現在、アフリカのほとんどの地域に、西欧的な価値観や社会システムが奔流のように流れ込んできている。それらは、各部族の伝統的な価値観、社会システムなどとはまったく異なっており、子どもたちの心に混乱、葛藤を引き起こす危険性がある。このことは、Namangaのような多種の部族が集まる地域で特に強く生じる可能性がある。
- (8) 本調査の対象は、低年齢児が多いこと、小学校に行っていないことなどを考慮して、「起きるときに明るくなっている?」とか、「アザーンが聞こえてから寝るの?」などの補完的な質問を行い、起床、就寝時刻を確定することを試み、信憑性を高めるように工夫した。

【参考文献】

- Erikson, E. H. 1963 "Childhood and Society" 仁科弥生訳、1977 「幼児期と社会」みすず書房
- 日高博子 1984 「コンザ村の子どもたち」ホルプ出版
- つ舎 1988
- 松園万亀雄 1991 「グシイーケニア農民のくらしの倫理」— 弘文堂
- Merand, P. 1977 "La vie quotidienne en Afrique noire L'Hrmattan", Paris, 下田文子訳
- 1991 「アフリカの日常生活」新評論社
- 西方毅 2006 「ケニア、都市部と農村部の子どもたちの日常生活」目白大学人文学研究 3 pp113-121
- オレ・サンカン, S.S. 1979 「我ら、マサイ族」、佐藤俊訳 1989 どうぶつ社
- Read, D. 1979 Barefoot over the Serengeti. 「マサイ族の少年と遊んだ日々」寺田鴻訳 どうぶつ社、丹楚靖子 1990

【要約】

現代社会、特に物質文明や情報化の進展が子どもの発達に及ぼす影響を検討するために、それらの影響がまだそれほど及んでいない、Kenyaのnursery schoolの子どもたちの生活実態についての調査を行った。調査は、自由記述式の質問紙法で、口頭で質問し、口頭で回答してもらう方法を採用した。nursery schoolの子どもたちであるが、年齢は6歳～10歳である。調査結果から、家の中で子どもたちの生活空間は極めて限られている、子どもたちが家の中で生活することが少ない、父親不在家庭が多いなど、日本を含めた先進国とは家ないし家族の機能が異なること、今回の調査対象の子どもたちは幼いにも関わらず、家の仕事の一部を責任を持って遂行していることなどが明らかになった。また、子どもたちの生活の意識、欲求や苦勞、楽しみなどについての調査項目では、「遊びたい」、「空腹がつらい」など、事前に予想される回答もあったが、「家の手伝いがしたい」、「勉強したい」、「特に欲しいものはない」など、意外な回答もあった。これらは、経済的な貧困がもたらすものであると考えられるが、同時に、日本のような先進国では見られない、素朴な環境のもたらすものもあると考えられる。これらの子どもたちの心理的な特性については、今後さらに追求を続ける予定である。